

大いなる批評性の発揮

法蔵館
1980円

菅原 潤著

◆ 梅原猛と仏教の思想

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切つて捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかつた。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快樂や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的

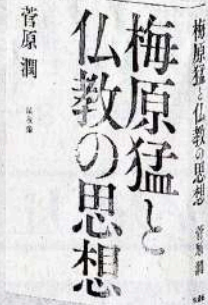
評 中島 岳志
(東京工業大学教授)

で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求め

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じるのができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなつて3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。



すがわら・じゅん
1963年仙台市生まれ、日本大学教授。著書に「弁証法とイロニー」「京都学派」など。

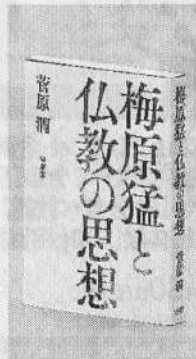
思想 梅原猛と仏教の思想 (菅原潤著)

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底(みなそこ)の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切つて捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかつた。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性



が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相(おうそう)」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相(げんそう)」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じることができなくなつた現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

(中島岳志・東京工業大学教授)

(法蔵館・1,980円)

梅原猛と仏教の思想

菅原潤著

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切つて捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかつた。それは、

私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通つた。ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その

すがわら・じゅん 1996
3年仙台市生まれ、日本大学教授。著書に「弁証法とイロニミー」「京都学派」など。

大いなる思想家の輪郭

生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となつて再びこの世に帰つて来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなつて3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

評者 中島岳志・東京工業大学教授

(法蔵館・1980円)

